

# 人生100年時代に対応できる社会福祉人材養成教育に関する一考察

高橋 昌子

One consideration about the social welfare human resources training education that can support  
in the times for life 100 years

Masako TAKAHASHI

## 要 旨

わが国にとって喫緊の課題である社会福祉分野での人材確保は人材育成の段階からの取り組みが重要である。社会福祉士をはじめとする多種多様な問題を抱える人々に対する現役の社会福祉専門職と、将来、社会福祉分野で活躍を目指す学生を重要なマンパワーとしてとらえ、養成校での取り組みを通して、社会福祉専門職養成教育に対して一考察を加えるものである。

キーワード：社会福祉士、ソーシャルワーク、養成教育、社会福祉マンパワー、相談援助、SDGs

## はじめに

人口減少社会ならびに少子高齢社会という大きな特徴を有するわが国において、社会福祉分野での人材確保は人材育成という観点からも喫緊の課題である。そこで、本稿では、多種多様な問題を抱える人々に対する支援の専門職である社会福祉士をはじめとする社会福祉専門職に携わる現役の関係者と、将来、社会福祉分野での専門職を目指す学生を重要な社会福祉マンパワーとしてとらえる。本年度の専門演習の取り組みと指導の振り返りを通して、さらなる社会福祉専門職養成教育への効果的かつ効率的な方法を見出したい。途切れない専門性と実践力を兼ね備えた社会福祉マンパワーの確保と活用という課題に対して、若い学生たちと社会的評価と要請が高まるソーシャルワーカーらとの効果的な連携により、大学という教育現場からSDGsの17の目標を発信できるのである。

## 研究目的

働き方改革をはじめ、現役世代に加え女性や高齢者等の活躍への期待が広まるなか、人口減少社会と少子高齢社会というわが国の大きな時代背景を受け、喫緊の課題である社会福祉分野での人材育成に対して考察を行う。国家資格である社会福祉士をはじめとする社会福祉マンパワーの質と社会的評価を高めることと、若い学生を重要な社会福祉マンパワーとして育成するための効果的な指導方法に対して一考察を加えることを本研究の目的とする。

## 研究方法

教育現場での社会福祉マンパワー育成に対する効果的方法を考察するため、社会福祉の専門職の方々と大学生とが情報や意見を交換しながら交流を図る等の機会を設けた。本稿における本年度の指導担当科目である3、4年次の専門演習を活用した取り組みを以下に記した。

- ①社会福祉士国家試験対策に携わる外部講師を招聘し、社会福祉士国家資格取得への動機づけを強める。
- ②児童養護施設ならびに乳児院への訪問により、児童福祉分野における社会福祉マンパワーの活躍と役割等に対する理解を深める。
- ③卒業論文作成における調査を社会福祉現場の協力を得て実施し、事例研究につなげる。
- ④現在、高齢者福祉分野の職員として働く卒業生を招聘し、社会福祉分野での就職活動への取り組みとやりがい等を学ぶ。
- ⑤地域包括支援センター、グループホーム、病院、それぞれの職場で活躍する社会福祉士を招聘し、各分野における社会福祉士を含む社会福祉専門職としての配属意義、役割、課題等を学ぶ。

## 大学における社会福祉マンパワー養成教育について

### (1) 2019年度担当の専門演習受講生を対象とした取り組み

社会福祉士養成校では、社会福祉士の国家試験受験資格を取得するため、「人体の構造と機能及び疾病」や「相談援助の基盤と専門職」をはじめとする全19科目の受験科目に対する授業と、相談援助実習ならびに相談援助演習を受講し、学修を進めている。各科目はそれぞれに専門性を深め、関係性をもちながら座学、演習、実習という異なる授業形態を活用し展開される。養成校としての大学においては、社会福祉士受験科目だけでなく、その他の必須科目や選択科目の受講が義務付けられており、総合的な学びにより、社会人として卒業していく。社会福祉士の国家試験受験資格を選択しない学生も、学科の特徴である社会福祉に対する関心や学びへの意欲は高い。そこで、担当教員の特徴を活かしながら、社会福祉全般について指導を受け、学びを深めることができる専門演習を活用し、社会福祉士国家試験（以下、本国家試験）受験の有無を問わず、大学生を社会福祉マンパワーとして育成する取り組みが可能であった。本稿での取り組みだけでなく、これまでも本専門演習における指導により社会福祉士国家資格を取得した受講生達、社会福祉分野での専門職やその他の職員として活躍している学生等の卒業生を複数輩出してきた。以下に、本専門演習での取り組みを記し、考察へつなげる。

### (2) 社会福祉士国家試験対策への取り組み

本年度は、学外の社会福祉士国家試験対策講座等を担当している外部講師を招聘し、本専門演習3年次・4年次生のうち希望者が参加できる機会を提供した。本国家試験への具体的な取り組み方と本国家試験受験へのモチベーションを高める指導につなげるため、春学期にこの機会を設けた。

3年次、4年次生に対しては各学年で本専門演習以外の科目として本国家試験対策講座が組み込まれている場合もあるが、本専門演習では本国家試験の受験を目指す学生の中から希望者が本企画へ参加できる機会を提供した。長年、学外で有料の本国家試験対策講座を担当している講師に本年度の本国家試験への対策ならびに過去の試験の傾向等について講義形式での指導を依頼した。4年次生3名、3年次生5名が参加し、真剣に受講し、講師に活発な質問を投げかけた。本年度あるいは来年度の受験に向けて受講生それぞれが本国家試験への取り組み方をより具体化する好機となった。さらに、通常は主に大人数への講義を担当している本外部講師の感想として、少人数の受講生に向けての講義への有効性も指摘された。社会福祉の専門職を目指す大学生にとって国家試験を受験することは、社会福祉マンパワーとして活躍するためのスタートラインに立つことであることを本取り組みでも再認識することができた。本講義後、4年次生はより具体的となった自分に適した受験勉強の仕方を確立しつつ、春学期に実施したことにより今後の模擬試験や受験科目への取り組み方の参考となった。3年次生にとっても早くから本国家試験を意識した取り組みの重要性を実感し、研究室に常備している本国家試験関連の参考書や問題集の貸し出しも増え

た。本演習ではお世話になった方々には必ずお礼状を送付しており、今回の外部講師の方からもお礼状に対する感想が寄せられ、こうした対応は、今後の企画継続にもつながることが多い。

### (3) 児童福祉施設訪問による学外学習について

児童福祉に関心のあるゼミ生も多く、本年度は3年次ゼミ生が希望した児童養護施設と乳児院への訪問を春学期に実施した。3年次ゼミ生8名が全員参加し、訪問先に適した手土産の選択、予算や購入をゼミ生が相談し対応すると共に、事前学習として、両施設について調べ、概要発表、質問事項の検討等を自主的に行った。当日の両施設の説明や子供たちの様子を間近に拝見し、児童福祉分野における現状への理解を深め、見学後の社会福祉士有資格者である施設長2名からの事後指導の場においては、学生からの活発な質問が飛び交い、有意義な時間となった。

まず、同敷地内にある児童養護施設の見学は施設長の引率で見学可能な場所を案内していただき、各担当職員の説明を受けることができた。学生にとっては、下校してきた子供たちの様子に触れ、年齢や学年の違いだけでなく、それぞれの子供の個性や特性の違いについても視野が広がった。「答えることができることは何でもお答えしますよ。」というフロアごとの担当者の配慮もあり、学生からは積極的に質問がなされ、生活の場である本施設の役割への理解を深めた。次の乳児院では施設長がまとわりつく幼児たちと一緒に、学生を引率して下さった。2年次で保育実習に取り組んだ学生もおり、幼児たちと一生懸命コミュニケーションを図ろうとし、児童養護施設とは異なる子供たちへの職員のかかわり方についても実際の現場で理解を深めた。案内係の幼児についても施設長からそれぞれの特徴が説明され、学生たちの児童福祉施設に対する関心はさらに深まり、正しい理解へとつながっていった。両施設を見学した後、両施設長同席のもと、学生からの感想や質問に対応する時間を設けた。児童福祉の現場を拝見した後の感想ならびに質問は事前に考えてきたものに比べて、より具体的な内容であり、焦点が絞られた質問等であった。さらに、今回も前述のようにゼミ生全員がお礼状を送付し、今後のボランティア活動、レポート作成や卒業論文への活用等、学生達の視野の広がりを相互に理解できたことに加え、今後のご指導の継続や連携体制も確認することができた。

こうした社会福祉現場への訪問や社会福祉専門職の招聘等への取り組みは毎年実施しており、担当教員がもつ社会福祉専門職との日常からの関係性が、次世代の学生に対する養成教育に直結することを今回も再確認し、有意義な活用が証明された。本取り組みを春学期に実施したことにより、秋学期には高齢者福祉施設への訪問を希望する意見がゼミ生から出たため、現在、前述の関係性を活かしながら調整中である。

### (4) 卒業論文作成における社会福祉現場の協力体制について

これまで卒業論文作成に対して、何か所かの社会福祉現場から協力を得て実施しているが、本年度は4年次生1名が同法人の高齢者施設と保育所に卒業論文（以下、卒論）に関する調査を依頼し、快諾された。数年前より両施設共に本学科における教育に対して大変協力的であり、様々な学年の指導に活かされてきた。前年度に本専門演習で社会福祉現場の学びのため訪問した施設であり、その際、本施設の取り組みに興味、関心を深めた学生がその取り組みを卒論テーマに選び、調査を依頼したという経緯がある。季節の行事に関係する取り組みにも対応できるよう、本学生が単独で数回にわたり両施設を訪問し、調査を進めた。本格的な調査に対する関係書類作成や依頼方法、調査内容等を個別指導し、長期休暇中も指導を加えた。調査終了後の対応や卒論作成作業等について本専門演習を中心に指導し、調査先の事例研究を活かした本学生オリジナルの卒論が完成した。これまでの対応通り、卒論協力先には卒論審査会終了後に完成した該当学生の卒論をお礼状と共に届ける予定である。今回の卒論の完成と送付についてはすでに連絡

済みであるが、調査協力中も該当学生からの連絡だけでなく、指導教員である筆者からもその都度、連絡や報告等を行い、施設側からも対応の説明や施設側の様子やメリットなどが伝えられており、密な連絡の効果を実感している。また、卒論を作成している他の学生にとっても、調査への手続きや対応、卒論の内容や作成方法等、参考になることが多く、学生間の情報共有にも有効であった。

#### (5) 卒業生から学ぶ社会福祉専門職について

前述したように、本学科の卒業生の多くが社会福祉現場で活躍しており、本専門演習の卒業生もまた社会福祉の専門職として輩出している。毎年、本専門演習の先輩である卒業生を後輩である在学生の学びのために招聘し、筆者よりもかなり在校生の年齢に近い卒業生から、社会福祉現場の現状と、専門職としての働き方等を学ぶ機会を設けている。本年度は、卒業後5年間同じ職場の高齢者福祉施設に勤める卒業生を本専門演習の春学期に招聘し、4年次生に向けた在学中の就職活動、就職先の様子、高齢者福祉施設の現状等の内容で授業時間を延長し昼食も交えながら進んだ。高齢者福祉施設への就職を希望するゼミ生からは具体的な質問が続出し、最近、求人業務を担うようになった本卒業生にとっても現役学生の情報収集に役立ったという意見が出された。就職の話題に偏ることなく、卒論や国家試験への取り組み方、残された大学生活の過ごし方等、多岐に及んだことも様々な学びにつながっている。社会福祉現場の最新の情報を得ることができたゼミ生は、社会福祉専門職の働き方に対するイメージがより一層明確になったようで、その後の就職活動も自発的で積極的となり、全員、早めに就職先が決まった。また、卒業生が在学中に属していた同じサークルの現3年次ゼミ生がおり、先輩とサークルに関する話題にも触れることができた。こうした卒業生との交流は、有効なアドバイスを多く得るものであり、社会福祉の現状を正しく理解することにより、さらに社会福祉に対する魅力を高める機会となると考える。連絡を取りやすい、同じ専門職の視点を確認しやすい、リラックスした雰囲気や依頼できるなど、卒業生と元指導教員という関係性を有効に維持しながら活用できる本取り組みは、今後も続けることができると確信している。送付したお礼状を受け取った卒業生からも、今回の出会いが大切な時間であったことが伝えられ、その旨、学生たちに伝えた際には、自分たちの後輩への対応についても考えるきっかけになったようである。

#### (6) 現役の社会福祉士との交流事業について

2014年より兵庫県社会福祉士会では大学生との交流会事業を実施しており、初回は本学で担当専門演習の授業に取り入れ、その後も本専門演習では現役の社会福祉士を招聘する本事業を活用している。大学生の社会福祉士像をより明確にし、社会福祉専門職や社会福祉の仕事の魅力ややりがい、国家試験への対応等、先輩社会福祉士のこれまでの経験を活かした本音を交えた意見交換会の場となっている。招聘する社会福祉士も、2名から6名と年度によって異なるが、本稿では今回3名の社会福祉士と3年次ゼミ生8名との交流事業について記すこととする。

本年度の秋学期に、地域包括支援センター、グループホーム、病院の職場で活躍する3名の社会福祉士を招聘し、準備した資料と飲み物等で和やかな雰囲気のなか学生8名との交流会を進めた。事前学習として、学生達が3名の社会福祉士の職場を担当で調べた内容を報告し、今回の貴重な機会にどのようなことを社会福祉士に尋ね、意義ある意見交換会にするかを相談している。当日は、それぞれの自己紹介後、司会進行は学生が担当し、事前に準備した質問やその場で考えた意見等積極的な発言が続いた。毎回、ゼミ生主体の交流会を心がけており、相談援助の専門家である社会福祉士からは全ての質問や感想に適切で印象的な姿勢で応じていただいた。そうした姿勢からも社会福祉士像をさらに明確にできるのである。社会福祉士の国家試験を受験しない学生からも、日常的に抱えている社会福祉への興味や関心について、素直

で学生らしい感想や質問が出ていた。司会進行を務めた学生たちの敬語をはじめとする言葉遣いも丁寧であり、普段、使い慣れない敬語の習得にも役立っていた。社会福祉専門職を目指す学生達を目の前にして、現役の社会福祉士の方々も、後継者育成に対し非常に協力的であり、今まで話したことがなかったという本音の話がいくつかあり、筆者が予想していた以上の教育の場となった。幅広い社会福祉の現場とそれぞれの専門職としての特性や配属意義、役割、課題等について座学では学びきれない演習本来の意義を見出した時間であった。場所の設定から後片付けまで全て学生達で行うことができたため、指導教員として筆者は3名の社会福祉士の接待等余裕をもって対応することができた。前述のように、1週間以内に送付したお礼状についても、3名の社会福祉士からは、若い学生の意見をこれからの職務に活かしたい等、最後までしっかりと意見交換、交流ができたことと確信している。

## 考察

これまで本年度担当の専門演習において社会福祉専門職育成に関する指導について述べてきたが、全て単年度の取り組みではなく、これまでの取り組みの基盤の上に成り立っている事項ばかりである。そうした継続性を重視しながら、研究方法で記した5つの取り組みを通して、考察につなげていくこととする。

まず、全ての取り組みに共通していることは、①事前学習の必要性、②ゼミ学生の主体性重視、③専門機関や専門職との良好な連携と関係性、④適切な事後指導、であると考えられる。

①の事前学習については、その取り組みのテーマ、主旨を理解したうえで各主題に沿って訪問先や招聘講師等についての情報収集を行い、その情報を全員で共有する。その他にディスカッションするのは、質問事項の検討や進行方法、準備と片付けまでの計画と役割分担等であり、3年次、4年次、合同等それぞれの形式によって異なる。学生の事前学習に不足している部分は筆者が補足指導を加え、気づきにつなげており、当日のスムーズな進行に活用する。こうした事前学習は当日の学びを深めるとともに、訪問先や招聘講師へのマナーであると指導している。

②のゼミ生の主体性は常に重視しており、様々な取り組みに対する最初の紹介やコーディネートは担当教員である筆者が迅速に行うが、企画が実施できることが決まった段階で手土産品の選定や予算や購入持参担当者等具体的な動きについてはゼミ生が主体的に担うことができるようなプロセスを構築している。学生全員が役割を担うことができるように決め、当日までの準備、当日の時間配分や様々な場の設定、司会進行、質問事項、取り組み終了後の対応等を学生主導で進めるが、総じて適切な学びの姿勢で臨んでいる。

③については、取り組みの発案から専門機関や専門職との良好な連携と関係性がなければ適切に活動できないといっても過言ではないであろう。そして、取り組みを終えた時点で、これまで培ってきた連携と関係性がさらに強固になっていくという良好な循環に結びついているからこそ、今後の取り組みへの継続性が確保できるのだと考えられる。年度によって、ゼミ生の社会福祉への関心ごとが変わる場合もあれば、変わらない場合もある。そのためには、ゼミ生の要望に応えるべく選択肢の確保が教員の指導力として求められる。そうした連携と関係性を維持しながら、広め、深めていくためには筆者の場合、社会福祉士会をはじめとする社会福祉を専門とする他機関との連携が不可欠である。例えば、兵庫県社会福祉士会では実習教育支援委員会が2014年から企画実施している「現場で働く社会福祉士と学生の交流会」を、本専門演習では活用している。交流会（講義）を通じて、学生に社会福祉や社会福祉士の魅力を伝えたいと始まった本企画は専門職団体である兵庫県社会福祉士会の活動内容を広めるためにも有効な取り組みとなっている。本会所属の会員複数名が大学等養成校の講義や企画に参加し、養成校の要望に応じた内容で行われ、毎年、近畿圏の社会福祉士養成校からの依頼を受けている。本専門演習では、交流会での講義はもちろん、卒論作成にも協力を得ている。社会福祉士会以外にも前述したような社会福祉施設・機関への訪問、

講師招聘、卒論への協力等については、学科で取り組んでいた地域福祉活動がきっかけで関係性が築くことができた施設、外部での活動を通して確立できた各専門職としての関係性、本学卒業後も続く専門職社会人としての卒業生との関係性等、時間をかけながらも広がりや深まりを伴いながらさらに様々な施設・機関、関係職員、卒業生等との連携と、関係性を現状のものとしてきた。

最後の④事後指導に関しては、その後のお礼状作成にも記したように毎回、取り組みの終了後、できるだけ早く対応するように心がけている。社会福祉専門職として習得すべきスキルの1つに記録に対する学修が挙げられるが、文章力、説明能力を高めるうえでもお礼状の指導は重要と考え、指導を続けている。お礼状作成と共に、その都度、振り返り授業を本専門演習に取り入れ、客観的に学生自身の学びを見つめ直している。学生同士で意見を述べ合う機会は、お礼状の作成にも効果的であり、内容や文章表現にも表れる。当然、不適切な表現や用語等については指導を加えるが、徐々に文章力も説明能力も向上していく。学生たちの素直で率直な意見は、現役の社会福祉専門職にとっても新鮮であり、参考になるという意見が多い。こうした相乗効果も事後指導までを統合して得られる関係性と考え。事後指導から個別のボランティア活動や卒論協力につながる学生もあり、後輩に向けても連携を強固にできるのである。

以上のように、社会福祉専門職の人材育成指導に関して、多くのアプローチの方法を駆使しながら、外部の社会福祉専門職、将来の専門職を目指す学生たち、そのつなぎ役である教員の3者連携が、いわゆるソーシャルワークの視点を重視した教育方法を生み出しているといえよう。それは、以下に示したような仲村がまとめた専門職としての社会福祉士であるための特徴<sup>1)</sup>にも合致し、現役の専門職と学生が連携して取り組む教育にも通じるものがある。

- ① 専門職とは、科学的理論に基づく専門の技術の体系をもつものであること。
- ② その技術を身につけるのには、一定の教育と訓練が必要であること。
- ③ 専門職になるには、一定の試験に合格して能力が実証されなければならないこと。
- ④ 専門職は、その行動の指針である倫理綱領を守ることによって、その統一性が保たれること。
- ⑤ 専門職の提供するサービスは、私益ではなく公衆の福祉に資するものでなければならないこと。
- ⑥ 社会的に認知された専門職団体として組織化されていること。

次に、こうした取り組みが人生100年時代の社会福祉マンパワーの育成にどう適応していくのかを考えてみると、人生100年時代を見据えた経済社会システムを創り上げるための政策のグランドデザインを検討する会議として、2017年9月に「人生100年時代構想会議<sup>2)</sup>」が開催され、本会議の構成員の有識者としてLIFE SHIFTの著者であるリンダ・グラットン ロンドンビジネススクール教授が含まれている。彼の著書を元に2007年に日本で生まれた子供については107歳まで生きる確率が50%もあるという超長寿社会において、人々がどのように活力をもって時代を生き抜いていくか、そのための経済・社会システムはどうあるべきなのかこそが、「人づくり革命」の根底にある大きなテーマだと示されている。本会議の具体的なテーマとして、「①全ての人に開かれた教育機会の確保、負担軽減、無償化、そして、何歳になっても学び直しができるリカレント教育、②これらの課題に対応した高等教育革命、③新卒一括採用だけではない企業の人材採用の多元化、そして多様な高齢者雇用、④これまでの若者・学生・成人・勤労者、退職した高齢者という3つのステージを前提に、高齢者向け給付が中心となっている社会保障制度を全世代型社会保障へ改革していく。」という取り組みが始まっており、その鍵を握るのが「人づくり革命」であり、人材への投資だと強調している。さらに、人づくり革命の基本構想の第4章は「大学革命」であり、「大学は知の基盤であり、イノベーションを創出し、国の競争力を高める原動力である。人づくり革命を牽引する重要な主体の1つとして、時代に合ったかたちに大学改革を進めなければならない。」と記されてい

る。特に、「各大学の役割・機能の明確化」では、私立大学については、各大学が人材育成の3つの観点（世界を牽引する人材、高度な教養と専門性を備えた人材、具体的な職業やスキルを意識した高い実務能力を備えた人材）を踏まえた選択を行うとともに、役割・機能の明確化を加速する支援の枠組みを設けるとなっている。また、「学生が身に付けた能力・付加価値の見える化」は、大学卒業生の質の改善のため、大学に対して学生の学修時間、学修成果などの情報の公開を義務付け、学生が在学中に身に付けた能力・付加価値の見える化を図る。産業界においては、採用プロセスに当たり、「求める人材」のイメージや技能を具体的に示していくことや、大学が示す可視化された学修成果の情報を先行活動において積極的に活用していくことを経済団体を通じて各企業に促すとともに、企業が大学等における学修成果を重視しているとのメッセージを学生に対して積極的に発信すると記されている。

こうした社会状況である人生100年時代を迎えるにあたり、大学における人材育成は「人づくり」と「大学」という2つの視点の革命でもあり、社会福祉分野におけるマンパワーの育成教育の重要性を見出すことができる。社会福祉の専門職を目指す学生にとって、分野を限定するのではなく、様々な社会福祉現場への理解と学びが必要である。そのために学びの場の選択肢を広げ、現役の社会福祉専門職等との連携を深めていき、後継者育成に努めていく。そうした積み重ねが、社会福祉専門職の知名度や専門性を高め、人生100年時代の社会を持続可能にするのである。

## おわりに

現代社会における社会福祉専門職の活躍が未来の社会においても有効活用できるように人材確保は喫緊の課題であると強調してきたが、専門職の育成は養成校だけでは不十分であり、関係機関や施設との連携が不可欠であることも再確認しなければならない。次世代を担う現役の学生を専門職として養成、育成するためには、現役の専門職の協力が重要であり、後継者育成の義務を負っているという責任感もまた必要である。社会福祉の現場と教育の現場をつなぎ育成教育にあたる筆者にとっても、その責務の重要性を日々痛感しており、教員同士ならびに社会福祉専門職同士でこれからも質の高い後継者へのバトンタッチを大きな目標としている。

尚、本研究は「2019年度神戸親和女子大学第2種研究費」の即成による研究の一部である。

## 引用文献

- 1) 日本社会福祉士会編「新社会福祉援助の共通基盤（上）第2版」、2009年、中央法規出版、p iii
- 2) 厚生労働省HP

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei100nen/>

## 参考文献

- ・リンダ・グラットン／アンドリュー・スコット著、池村千秋訳「LIFE SHIFT」、2016年、東洋経済新聞社
- ・内閣府編集「令和元年版 少子化社会対策白書」、2019年、日経印刷株式会社発行
- ・内閣府編集「令和元年版 高齢社会白書」、2019年、日経印刷株式会社発行
- ・日本社会福祉士養成講座編集委員会編集「相談援助の基盤と専門職 第3版」、2015年、中央法規出版
- ・本郷一夫編著「実践研究の理論と方法」、2018年、金子書房
- ・西内章著「ソーシャルワークによるICT活用と多職種連携」、2018年、明石書房
- ・一般社団法人兵庫県社会福祉士会HP

<http://www.hacsw.or.jp/>